

オペラ「アイーダ」を見ました。

2025-3-4

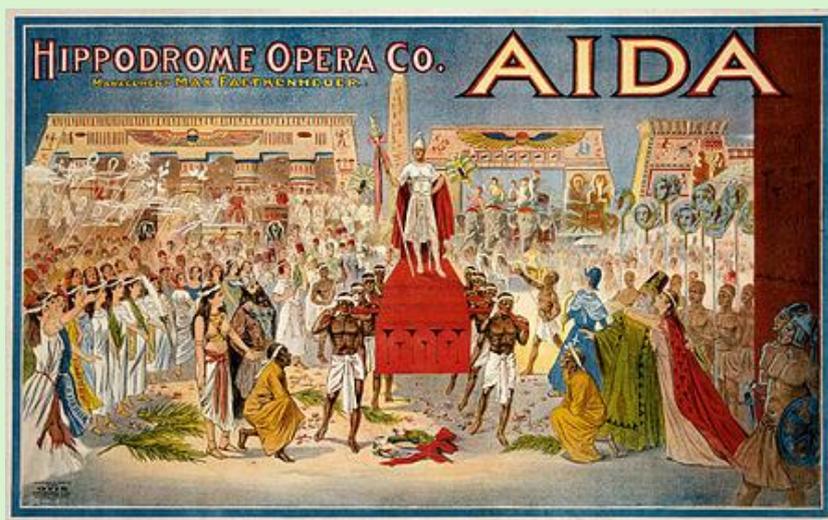
野口幹夫

昨年11月に湘南シネマ109でオペラ「ホフマン物語」を見たことを書きました。そのきっかけは、新しい友人との付き合いはじまりで、彼がイタリア航空に勤めておられたとき、日本からのオペラツアーを案内されたことからヨーロッパのオペラに詳しくなられたことなどを紹介しました。NYメトロポリタン歌劇場の2025年春の連続公演のその続きで先月は「トスカ」をみ、今月は「アイーダ」を見てきたことをご紹介します。

「アイーダ」といえば、ヴェルディの代表作の一つ、多くの皆さんは、このオペラの中のハイライト エジプト軍の凱進行進曲 通称「アイーダ行進曲」を思い浮かべられるでしょう。

6本のアイーダ・トランペット

(普通より長い)を中核として
壮大な行進がはじまります。実際劇場に馬やラクダ、果ては実際の象まで出た野外劇場での公演記録もあるようです。私も



それしか思い浮かばなかったのです。

今回3時間に及ぶ長大なオペラに圧倒されながら、はじめに抱いていたのとまったく違う深刻な思いにとらわれてしまいました。

このオペラはすでに名声を獲得していたヴェルディにエジプトの総督からの依頼があった

ことから始まりました。

あらすじはこうです。

エジプトとエチオピアは当時の強国同士で隣国、相争っていました。その繰り返しの戦争の中でエチオピアの王女アイーダは囚われの身となりエジプト宮殿で奴隷として働かされています。その可憐な姿に愛を抱いたのが、エジプトの将軍ラダメス。逆にそのラダメスに思いを寄せるのがエジプトの王女アムネリス。深刻な三角関係です。折からエチオピアとの戦いが始まりラダメスは、全軍を率いて戦いに向かいます。

そして勝利して有名な行進曲に乗って凱旋してきます。捕虜として引き連れたのがアイーダの父エチオピアの王アモナスロ、そこでアイーダと親子の対面をしてしまいます。勝利を祝してラダメスには、エジプト王ファラオから、自分の息女である王女アムネリスを妻として迎え、王位継承権も与えられるのですが、ラダメスはそれをことわり、アイーダへの愛を貫きます。一転してラダメスは反逆者として裁かれ、生きながら神殿の地下の墓に埋められてしまうのです。その墓に先に忍び込んでいたアイーダと、あの世での幸せを祈っての死で幕となりました。

勇猛果敢なアイーダ行進曲からの想像では、このオペラは戦いへの賛歌だと思いこんでいましたが、これはアイーダ自身捕虜の奴隷であり、最後は生きてまま墓に葬られるというのですから、終止戦争による不運・悲劇への過酷なまでの描写と告発でした。

ヴェルディが生きた時代 1850 年頃の欧州は戦争に明け暮れていたのです。ナポレオンに始まり戦火は全欧州に広がり止むことがなかったのです。アイーダの公演直前には普仏戦争(フランスとプロイセンとの



戦争) が始まりカイロ公演を延期しているくらい日常の生活への脅威となっていたのです。

ヴェルディは音楽家にとどまらず周りからの要請で議会の議員などの公職もつとめ、政治の世界にも通じていました。だから心底反戦厭戦気分にあったとしても不思議ではないのです。

壮大なオペラ音楽の感動に浸りながら、そんな感想も抱きました。